湖月抄

別3
80
1

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

初音　并　細　花　以哥并詞為巻名　哥「年月をまつにひかれてふる人にけふ鶯のはつねきかせよ」詞「けふは子日なりけり」又此巻にきこえてはつねをみるなるべしかまへにありけれど云々　花　源氏卅六歳の正月の事也并の勢の事聖年のまゝなれば玉鬘の并也　孟月　細　玉鬘の并くわ年中にまて月次に出る也　愚按　抄に玉鬘巻の終に二月の季になりてあるべしとそむけば正月なれ二条の東の院の何事ありて正月也とし玉鬘あり是彼一統の義に同じはいつまでも源氏の君と分明ならねども此統ハ此巻源氏卅六歳と云ならべし

閑院圖書部

岡本藏書記

年立かへる　細　正月一日也　くもれば冬の空なり晴ぬれば元日立春なるべし　師云年の暮年の雲の名残をもなく一天春色となれる也

数ならぬ　細　六条院を云にそれよりも光君の宮の辺これハ末葉つゞきたりともなしこそかきねの草も春めぐみの春のひかりのいつくしもたらぬなし

まして　細　六条院なり草生まれあつまりぞくる年始の儀筆麗なるやうの事いかさまでもうつくしくひろゐあるく

春の御殿　細　二條にて云紫の上の住給ふ所の様をいひて数ならぬ垣根の内と云也

年たちかへるあしたの空のけしきな残なくくもらぬうらゝけさには数ならぬ垣ねの内だにゆきまの草わかやかに色づきはじめいつしかとけしきだつ霞に木のめもうちけぶりをのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかしましていとゞ玉をしける御まへは庭よりはじめ見所おほくみがきましたまへる御かた〳〵のありさままねびたてんもことの葉たるまじくなん春の殿の御まへとりわきて梅の香もみすの内の匂ひにふきまがひていける仏の御国とおぼゆ

まして玉をしけらんと云し所の中くの浄土の紫上ノ方也。此段三段よわけて見べし
梅の香もみすの内の匂ひにふきまがひていけるほとけの　細河　生佛國ハ極楽なり
法華經云栴檀香風悦可衆心ヲ
さすがにうちとけて
細前の詞にいかめしく
きらゝに對して云
此詞ハ紫上の今少
躰なる所を云。要ハ
さうゆるくハなくて内を
も何心有る人ならはれ
きうびやかなりとて
又人のかうはくまど
さ様にハなく住給ふ
様し　師上詞にいかめ
うつくしくおはしますそ
がやきをしつるよそう
おくらしくて　師かう
人々らに對して中く
といへる
そぐさめのいはひして
もちひかゞみをさへとり
とうぞ　花　歯固ハ
元三の日歯固ハよ
はひとふり歯固ハよ
いひそふむる〳〵さう

さすがに打とけてやすらかにすみなし給
へり。さぶらふ人々もわかやかにすぐれたるを
姫君の御方にとえらせ給ひて（細　明石のひめ君也）
すこしおとなびたるかぎり、なか〳〵よし〳〵
しくさうぞくありさまよりはじめてめや
すくもてつけて、こゝかしこにむれゐつゝ
はがためのいはひして、もちひかゞみを
さへとりよせて、千とせのかげにしるき
年の内のいはひ事どもして、そぼれあへるに
（源氏也）おとゞの君さしのぞき給へれば、ふところで

つきたやすくおはしますとも云。一の巻に餅大根揃などりかくし此餅ハ近江のひきりの餅
と見へし。河　歯固し　師　さくといふてゆゐよなれり、万代続ためなるべし
らいせのうけにあらさまの内　細　田舎よハおもてを今年の事中也　花河　万代を祝ふ
そなと祝ひつゝめくせの後よもあんと云ハおもてをのやうきこの山を見てよまれたる
てそうものおいうせハ此事を見てよめる也によろこびなべく源を祝ふし
きぬれ　細　かれハ戯なり　河孟曰
ふるかれにひきそうとし　孟　源氏の女房衆源の近おき所が多くあつまりて
をきめ祝く　細　源の
いとこゝろかゝり
さしのそきのみとんて
そしくあし連悪しく
ゆりみべきあいは詞とゝけ
てる祝く源の仁恕する
おかりの発句　河　しらずさ
らぶさせん
八年経の祝ら　しらでん
コトフキ
寿詞　日本紀　言吹　日
中将の君　細　源ハ祝祝の
の時紫上の人々をもちひ
人なり。源氏の御うへにて源
のみうけおもんて
うらくそへてゆり
細　花　私の祝ひなりぞ
君をまそにいつくるへなり

ひきなほしつゝ、いとはしたなきわざかなとわ
びあへり。いとしたゝかなるみづからのいはひ（孟　源の見るいのうき祝ことぞ）
ごとゞもかな。みなをの〳〵思ふことの（めい〳〵の祝ふ事の道々なるべし）
みち〳〵あらんかし。すこしきかせよや。我ことぶき（それ）
せんとうちわらひ給へる御ありさまを、年（そのはじめ）
のはじめのさかえに見たてまつる。われは
とおもひあがれる中将の君ぞ、かねて
ぞみゆるなどこそ鏡のかげにもかたらひ侍り

仍十三日紀元四月子日引小松天皇超年号元 花円融院寛和元年二月十三日戊子御幸
紫野一立帳屋 此前殖小松下畧 今案此前小松山の小松をとりこめ
ひけこひろうこ 仍猪籠 檜破子 是御前二立女房破子目の御幸檜破子是
とうくりぬ 細能抜うりえ ひること
の枝よ 仍拾二 えく大君の えく よ宮
内し 細わくうりう
時えの御よ
ひうりくよ
の枝もの
くれつ
枝のよ
そえの日とくり
とゐひて 非拾二 の
物の
うえ
人り
寛和
年月を
の物
まつる
そえ
みもあ
ひえ
仍猪籠 檜破子 是御前二立女房破子目の御幸檜破子是
細能抜うりえ ひること
の枝よ 仍拾二 えく大君の えく よ宮
内し 細わくうりう
時えの御よ
ひうりくよ
の枝もの
くれつ
枝のよ
そえの日とくり
とゐひて 非拾二 の
物の
うえ
人り
寛和
年月を
の物
まつる
そえ
みもあ
ひえ



寛和二年四月廿日 細 ものの程 ひ
おれよひれて ひ
らひて ろ人 よ
のよろふ ろ
とをぬさ
ひえ日 れ
ひえ日 れ
寛和二年四月廿日 細 ものの程 ひ
おれよひれて ひ
らひて ろ人 よ
のよろふ ろ
とをぬさ
ひえ日 れ
ひえ日 れ



寛和二年四月廿日 細 ものの程 ひ
おれよひれて ひ
らひて ろ人 よ
のよろふ ろ
とをぬさ
ひえ日 れ
ひえ日 れ
寛和二年四月廿日 細 ものの程 ひ
おれよひれて ひ
らひて ろ人 よ
のよろふ ろ
とをぬさ
ひえ日 れ
ひえ日 れ

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号 本別3-1
ガラス使用

ほかくのごとく上臈しく
すりせさせ給へ年月へて
も不變人花ちる里の人
と世にかくれなし
いとなつかしくきこゆるか
らんいりせの哀
㳒 妹兄 日本紀 妻妹 万葉
我もかの三の君は御あれ
どかく手にのこしておき給
の好事にハ今もかくる
とく
すゝしさやうの事は
細 ゆかしく花散里の人から
めかしうむかし謝朝 不好
人也源の御ゆかりに猶ありて
おかしくて、よろのまれ
なりけり
花田ハ 細 さぬらいのうちの時
みえしけ。花よ洋かり
花 花散里ふ年内あさ花
田のさいのりんのこゝぬと
必ゆゑまふりそれとうかる
みそかの下の伴方より
も源氏のゆゑをかしきさま

おぼし川よそへてはかなの隔てもなく。哀
かゝれはすくしひすり。今はあはれなるよら
やうやはる裾もそてあふしきて給へは
ざりきやうにもむつましくあはれなりかん
いにしへの哀からうちそくうちのふこと嫌
へそくれど。すゝしとやりぶく[illegible]
まそかく涙ぞうすくいげにうらひかりうぬ
わかひふくはかなくもいぞくさらゐ
よそやうしなひとよあそくねどえひかれ
うつそうひあへべき。我なくしさく
人々はとぶらひめくるめきはありさ海とふ
くてうちとけうれしく[illegible]

かたり
やさしきさま 細 花散里はあるへきこととふかくいうたは[illegible]
まへりしく源の御ひめかなり 師 花田ハとふまりてうひかうつさ中ぞ[illegible]
えびかうし 伊勢 諸たる 鬘 をさけまへハ蒲萄(エビ)
かうしくらき給ふかのまつきさといつくしきやみうるそてうひかちんとよ蒲萄
あつかふかん 細 源の御わかし花散里ハ容貌(カホ)美麗(ビ)なる女なるさりの[illegible]
我ふのかくむさや申をもたる源かしくれしくそひのりく
うるさ人のつしうそ 孟 源の珠(ス)暑(?)わかくそ[illegible]
よみかへうしうひやとんのふりとうし。又云花散里をまされあ人を信ことをりて[illegible]
ままふうありうれとあへうまとまふの人はふさくれらうろうもてをうの世乃さ[illegible]
すまふとつり 細 花散里 [illegible]
はんのよりこさ
のはんふく侍ふよつけ
さくよ根をまふ沸気立
もかいさしく 師 花散里
のはんをとりてふかうさ
人のおもきは源の珠黒もち
らさあ花を源の娘しく
花散里
あさいうくも
細 玄年十一月より伊経
わかきは男とざらふかし
くる人をさとりく作あて
まふくかり

人のつゆくぞまれてそむけさるひなきし
くべきどうしたけの身うくかはことを我はんの
なげきも人のはんのうたれぞまされし
くらふやうにうちさへ。こよやうよ
ありそしの物語をぞやかうしくきこゆ
ものかのさんへよくらはすふさいくよ
すゑずれ給ふぬ御どもちはくはらひなりし

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

かふとおろしもゆゑあるい
まへし
さもありくしそし
料紙絹しハおりおり
ひしのつくへのやうなるを
かくしきろしのなかや
あらきさとのほか
明石上のかたら迄き欲
乃字なり

くしのそうぞうとゝき
細 唐のふとゆわりさ也
東京錦とハ白き唐錦
く弱者の背なり。花弁
河は詳く 兼唐東京と
云つる物そそうしくる
花統 河 舒明天皇御宇に
以唐東京錦ヲ朝よ
用ゐらる 花 唐東京
錦背は若の色の文花白

しまんぶろめつく。おとゞりのきんそし
まろ人なき所なりと、おぼしまへべの御つん
まふまてそとをりて、まふさとあらく
とぞう。黨がきまれり行もあやしのれ
きまおりすふらつきさきどのみやを
しあらり。まのすのうらりとひ風ふまま
めしく吹かりて梅しりそりまよげく
くゆぶさら。ふうじをハ人くず。いづくと
こまりくきのふよ。すゞりのおくりのかざさ
りしくさうしだとりらしくろうを。
とりつくきのよりくのそうぞうやうさの。
まくしきさあらうしうあれねり。

綾方一尺八寸。縁白地錦四
方二寸。裏蘇芳平絹也
縁也
火とけ 河 薫之普通の
火桶歟一説薫物の火取
のよし
えびりく 息いとふ
侍よはり。花よ律令り
花衣被香と云ハ
衣裳とまかつそくし
裛衣香と云ハ衣まつ
くんし 花 河 衣被
香ハ麝香の異名也見
延喜式
すゞりゆへあり
其常の人のまれなるよ
とりかりてあなかしとぞ
めぬるし
さえりしす 河 表紙
孟 表紙ぶきんかしず
とありかたなかしぞし
てとんしんなれてそと
ちともかゞみんとせ
むかへお文字かうのでに

ゆりげなりきんしらねざましとめさき
うしわかめ人とけよ。ぶでいうとも申しり
て。梅こりよぶありよ。えびりうのまま
ぐんぶゐとえんなりて今ことひとどぞ
まうらけさもすゞりうつかゆへありり
きざ海かけり。くもくしきうりりる
どなも。ぶえぐんに。めやもつくきすきもひ
よりぶ松乃けんしとめいでしとりけり
出ふよ。表紙りうこしもりくきすぐく
めでしや数のねがしよまつりひてき
あかりすね。表紙。絹の綺りぐいうりきを
もありさけりとまへい家しあれハなし

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』 請求記号 本別3-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1
ガラス使用

細 かやけしとハ花の色也世にすぐれめでたきさまなるも猶すゑつむ花のにほひのごとし
づかりさまをみそなへさせしゆみにあへるふにて
弄すらりきへしも 好物白氏文集 孟 花名の花もてはやし
くれつらんしきみくの
細 河海抄にいはく花
よくしくらむ花後下加
ける花大蔵卿八毎年
正月三日とのく色と
みそなへそ付八絃管
の役なしわりて公人
とこと桜はく源付
よれハ正月二日三日の
同よ両白家の其一流名
のあまよまうとせう
かしその付て絃管の
て源付きしく公付
朗詠のくゆさるへく
あ楽器とかちむ物
びやへしなそしふ拍
也唄一拍もへしちす
八拍用家すその名聞
但名多彼ハ名なるへく
絃管の職ならし

ちりまかへるさゝ。あゆけや。くしとみは 並 源の君と
もくゝろう。ゝのらえさんまそおやし 源の紫の心を察して
ことさらねえてわかくしるけりかし
しるさと。しもやごゝろり絡さてと。源 紫の気色と源の心
気色ともあしもおりしうろ。こしとやうれ 紫の如くあかさ
いへもあげまへ。まつゝゝてそをね 源之
そう。日さく地用のゝのどりめさ
里花あまんしりやくのことすぢき 牀
らりてぞばもかゝ給ち達事こさ
ちなご例の給りまくまりまてれ

わされればならぬかくひなれり
あそびし 細 紫上の姫君と申さん給ひ
紫上は正月は白のなりぬしとのすさん給の御心しく
るさぶらふ 細 源氏時宮は禄などなれどもとこへ源うれら
のおはしましつ
細 花は拝也
いそく
向右旗 旗の人なり
賄職とも云りりのとき
ありうるしたら
ひしれ藝能ひてる
まのくしとせり 細 源乃
の源もまりつ
源号のおかの裏をふ
まこそかんくるをもれ
なるハ其やうしく云々
源といふ物着のおよ
と後人あつしを云すれハ
源と云へかひあされ
つのくしよりもてなり
細 今源の末摘花をも云給

あそびおはする。引出物ろくなどもよろしき。そ
うつくしひ給へるかきをとしてしとも
てあしまへる中にもすこしうへる 細 源よりは紫もまた
ぐよ見給ひぬのゝれとうそうちて 紫もまたいまうち
もそれ 給ひし いゝそくくゆりて拍ち給すれど。にまへ 源の此箱之 ころ
そいけ給へれまふまろう。何のうちそ も十三人 孟 紫上の事也
かすぬありべどもなどもこの給よ 六条御息所之
まつるはんづひとかりなりまでて 孟 紫上の前にもまして 一二十二
けわやうちまゝするやはさらむなと抱し
ありのく。すぢるよんげさへし給つる

のそらもうつりて花の香さそふ夕風のどかなり（細書）
らい梅の香ともそれとわくべくもあらず（細書）
きと花とをひとくに愛でよと梅とひとしき花なり（細書）
梅のちくべ（細書）
時節よい大磐の例よるべくく（細書）
のこの（細書）風呂の前にもとゝそうさきこのわれ（細書）
さのうぐひすよりや鳴て（細書）



さゝさ（細書）朱草 後漢書 福草 日 村種 延喜式 紫草 日 記 曽祢好忠集
三枝（細書）とあり。故よ三茎四茎とつゞめよ。（細書）
みなくくなりて（細書）河 於蓮華中経十二大功 観経下品下生 元 十楽の中よ蓮元未開
楽のくし（細書）を生仏国よりそ仏のひかりをみ
よりみくめ出ゝよそ後蓮の中よ動とあるよ三重くハ下品下生よ多地 此度の中
不見仏 よい不見仏 よい往生をとうたへ
まてひくの作（細書）
世のうさのそくぬ山
よるぐ
（細書）
つまるさんのひかりとうぐ
ぼうんとそるも世のうれ
しみのわくべを添ふと

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

のとう和のうちさ
うそうのうちさなどいつよう
さとうつう例のうかうそうそうやうそ浜氏のをうつう御そこうれる
うづし次うちうさうのうりなぐねのうく
こや取家就之発うちさうちうちうちぬのうく
さうねいうさうねうく細花花岩梨黒八浜封面の附面をへぐそ
浜木下引つうひ細花花岩梨黒八浜封面の附面をへぐそれ
もそ次うちうのしよう末稿八末すとのけられ
浜うちうにおてとうつそうつるとおうくおうさ
しのうあうしんうさうくんのとようれうう和るう
今うくあうん細とうもうくうも浜をおうさうぐうう
うううさうもとうてのくうす山氏うさうのくうねうくよせのさ
つうのうさうもうのおに浜るうさ山さ面とうて
れうよそてうてうんうそめうつる細浜の仁常うおうり孟つうそそ
うくはうのうう

なぐと次ぐ江和よおうしうくひうそのうさ
しまうる山末稿のくうさ海あうそれなうり
みもうるべてのくうそうあうくれ
しうさ人末稿とう浜のくの出うさ風とう地をば表よそれぐよ
うそそとれんつうさぐめうそうくうなよあうりぐさ
さぞうう山末稿のくうふうるみぐよいてうさひげよう



うくうやうさくれうひうそくう浜うさ
死内くの浜あいうそうう和
のうやうめうつうさうさ
孟内表へうふうくうさうう
うううさくうそうきうう
のうやうううりうさき
うさうくみうううくうう
それ人うねてうくし
さうさうんうう
ふうこのあうう醍醐阿
闍梨之末稿の兄そこ
なる鼻の赤うさ仰ぐ
うの製来とうあひ
てりう松表末とうえぬの浜
ねし
うなぐぬと末稿の兄之緑
来表とうさうまうう事あう
その皮うぬとうぬざ
うへつうれしく
むうれうとうみぐ
それ末稿のうくんうよそ
うとうのまうくんうよえとう
うううーまうくされぐる



らうまうつうひうそくう浜うさ細浜の内うひうそれぐうう
ひうそれぐそうんうさうう
うそうそうれぐうくうう
ぐうくうやうう人の行うやうそ表
ぐうくうさうみうそうそうね
うそうそうれぐうくうう
ぐうくうさうみうそうそうね
だうそうひうそうくうう
うれみうひうそうくうう
あうそうさうをうそうさうとい
ひうぐうくうさうそうさうとう

国立国会図書館　タイトル『湖月抄』　請求記号　本別3-1

ガラス使用

〇それ〳〵の金風に……朱雀院の天元六年男踏哥ありし時の記録などにも
雨見えず。其後式ハ両宮と云書に見えたり
左右のたいハ 左右 孟 ひがしにしのたいなり …… 花 寝殿の
対西の対などの ……
……
……
……
……
八所院の人の名と……
……
水驛とは……
……
……
……
……
……水驛よりもとは……

……ねしつゝおはす。にしのたいの姫君は、
寝殿のみなみの御かたにわたり給ひて、こなたの
姫君に御たいめんありけり。うへもひとつ
ところにおはしませば、御几帳ばかりへだてゝ
きこえ給ふ。朱雀院のきさいの宮の御かた
などめぐりけるほどに、夜もやう〳〵
あけゆけば、水むまやにてことそがせ給ふ
べきを、例あることよりほかに、さまことに
ことくはへて、いみじくもてはやさせ給ふ。
かげすさまじき暁月夜に、雪はやう〳〵ふり

らひて饗応ある事なり。踏哥の人……を驛……人へ
……
飯を……
水驛とは……飯驛と用ゐ……
……を水驛といふ……
……
……
……麹塵
……
……
……
……袍の中に……
麹塵の袍……
白下襲……花……記ニ
踏哥の人装束……
冠 麹塵闕腋袍 白下襲
着深沓 持白杖 ……
……青色 麹塵袍……
下袴 表袴 半臂 白石帯 ……
今案 此青色とは……
……
袍と見えたり……

河 延喜十三年ノ記ニ云 暁頭風雪 及戌魁ニ雪晴 是踏哥ノ故也

つむ。松かぜこだかくふきおろし、ものすさまじく
もありぬべきほどに、あをいろのなえばめるに、
しらがさねのいろあひ、なにのかざりかはみゆる。
かざしのわたは、にほひもなきものなれど、
ところからにや、おもしろく、心ゆき、いのちのぶ
るほどなり。殿の中将の君、内の大殿の君だち、
そこらにすぐれて、めやすくはなやかなり。
ほの〴〵とあけゆくに、雪やゝちりて、そゞろ
さむきに、たけかはうたひて、かよれるすがた

白杖ハ舞人すくせとおとゝ舞童ハ総角とくゝゝくわり
わらはの綿ハ白踏歌の人以綿纏冠額也号高巾子云〻 孟 綿とは身
にかつく 花 西宮抄裏書云高巾子之六位以綿纏面云〻
殿の御前の御のてゐの事也 細 中将夕霧也公達ハ柏木なとくるの二人歌頭
花 延長七年踏歌左権中将伊衡左歌頭右権中将実頼右歌頭李戸王記
此例にや右記そのへり
竹川うたひて 細 うたふ躰也 河 竹川催馬楽呂竹川のうたなり 花 その
まに殿花園にはなれそやかなるてやめらしそぐくんて新撰式に云次王
卿以下に勧盃侍臣献雅也以下に行酒三四巡後漸調子唱竹川云〻
かよれる姿 細 舞也 河 舞のかゝれる旨其ア次の老は東はまひて〳〵くる紳
よまり 河 紳をのかろきを称し礼記曲と候り何哭への法説云〻
なつかしきもとかくさくらん
細 声ハ絵にかくとも
、孟 画書花不画香画書
雪不画声東坡十一李伯
時陽関図詩龍眠独識
慇懃処画出陽関意外声
春のかしきさうらん
孟 文見ミせハ柳桜をこ
きまぜて都ぞ春の錦なりける
こゝにハ仍霞の内に柳桜
の咲るれしとくゝ錦
の縁によりにし出とみて

なつかしき声〻の絵にもかきとゞめ 云
がたからんこそくちおしけれ。御
方〻いづれも〳〵おとらぬ袖ぐちども。こぼれ 孟 芳康の一方くまある人袖をいださせ給ふと也
出たるこちたさ。物のいろあひ 抄 多き也
なども。あけぼのゝ空に春の錦
たち出にける霞のうちかと見わたさる。あや

ゆくし 河 絵にみ江
細 花別効わり狂言か
おかしき昔にこそなりとくし
狂言帽子なとかけるなるべし
花 西宮抄云召御巾子
造作可奉高巾子二口 頭巾子
云〻 今案高巾子の冠ハ
巾子をなくし白き衣
まて是をかぶる舞人不
り先をならしてまさ
六位の舞人のかふる冠
と着と蕃よりかれ
ぬ液めるにして世ざる
れさなとハそり雅別よ
あるするわり
ことぶきのみだりがはしく
花 西宮抄云踏寿云二
叶 蔵人奏寿詞云〻 孟
とおもしハの後にとよ茅
雅楽と唱へし
なるつき 細 内裏まそハ
新式様くおりに見花宮三
宴によりて八六条院まで
の縁のまゝ 花 そつき綿

しく心ゆくみ物にぞありける。さる
は高巾子の世ばなれたるさま。ことぶきの 孟 踏哥をかめん
みだりがはしき。をこめきたる事も 抄 たはこと 狂言なるべし
ことことしくとりなしたる。なかなかなに
ばかりのおもしろかるべきひやうしも
きこえぬものを。例のわたかづきわたりてまかで 句
ぬ。夜あけはてぬれば御方〻かへり 元和の人こし
わたり給ひぬ。おとゞの君すこし大とのごもり 源氏
て日たかくおき給へり。中将の君を 源の御子
弁の少将にをさをさおとらざめるは。あや
しくいみそくどもあひ出つ此頃ハよこ
それいにしへの人のひとはまさりて

内蔵寮よりこれを奉ると内侍蔵人出納のものに延て綿を入てかうてむ
くんど歌ひ以下并童以上みなくに舞をこゝみて蔭とのかりての綿をかつく琴司等
のかみまで六位蔵人の驚中よりめつくして庭中までこれをとうてくるべこれ八内
裏の次式也
中将の事八弁のかね 細 紅梅の大臣也声能人之夕霧をあぢきなの詞之 孟同 師 中将八
夕霧之弁かね八柏木より弟紅梅のひとくらり
ゆらしへの 細 延喜天暦と時代をおもんじて此式書たり
中将などが 夕霧之
抄天下浦佐の道政道
有職の方とのことを。
かゝの様ひのうちるまで
とぢんかにまこせでと云ひ
しることり
身づからわかわれども
抄源氏の政道を向ふまで
にはらしくやうの様なる
まどのそはまりうらし
とうた書たまやうまおく

きかたやすぐれたることもおほかりけん。
なさけあるすぢはこのごろの人にえしも
まさらざりけんかし。中将などをばすく
すくしきおほやけ人にしなしてんと
なんおもひおきてし、身づから（源の心）のいとあざ
ればみたるかたくなしさをもてはなれよと
おもひしかど、なほしたにはすこしすき（風流のことをいふ）
たるすぢをとゞめてこそもてしづめ

道ならひとゞめしらば夕霧の下よりはやうのことをもかゝる戒めとよそにてなど
またいとめ 細 人ハ実法シツホウなるも叶はずのことく花実をわ存ぜずしてなし
孟 おほかた学文なりとて全酒法なるをもろしきとく
万春楽 花 西宮記云踏歌日舞人起座テ唱万春楽ヲ云云 今案万春楽ハ
八句の詩なり是を漢音カンオンにうたふ也
めうらひてるべきの
おかひはり万春楽と云ふ
なく踏歌の舞人の
うちうたふとて云ふと源
氏のにもうゝだにたの
事かくちずさびし二句を
ことばかり 我皇クワウ延祚 二
億仙齢 万春楽 元正慶 一
序年光麗 万春楽 下略
催馬楽淡海三船撰之ヲ
多氏伝之云云 師 是踏
哥曲也
人をさそへよ 細 夕霧く
ゆりたまひのゝめかして
又さゝよらくりまつとひ
まゐるのあでかくまり。
お遠の様を吹すくらう。
然まてもなりやうのは
おてうかへりくし

づめ。すくよかなるうはべはものし
げなりかしなど、いとうつくしとおぼしたり。（孟夕霧をさしてうつくしと也）
ばんすらく（万春楽）とくちずさびにのたまひ
て、人々のこなたにつどひたまへるついでに
いかでものゝねこゝろみてしがな。（女楽をしてみばやと也）
わたくしの後宴（ごえん）あるべし。とのたまひて
御ことどものうるはしきふくろどもしてひめ（河 秘）
おかせたまへる（置之）、みなひきいでゝ、おしのご
ひ、ゆるべるを（おゆるべる絃を調なり）とゝのへさせたまひなどするに
御かた／＼心づかひいたくしつゝ（女楽のための心）

国立国会図書館 タイトル『湖月抄』 請求記号 本別3-1
ガラス使用

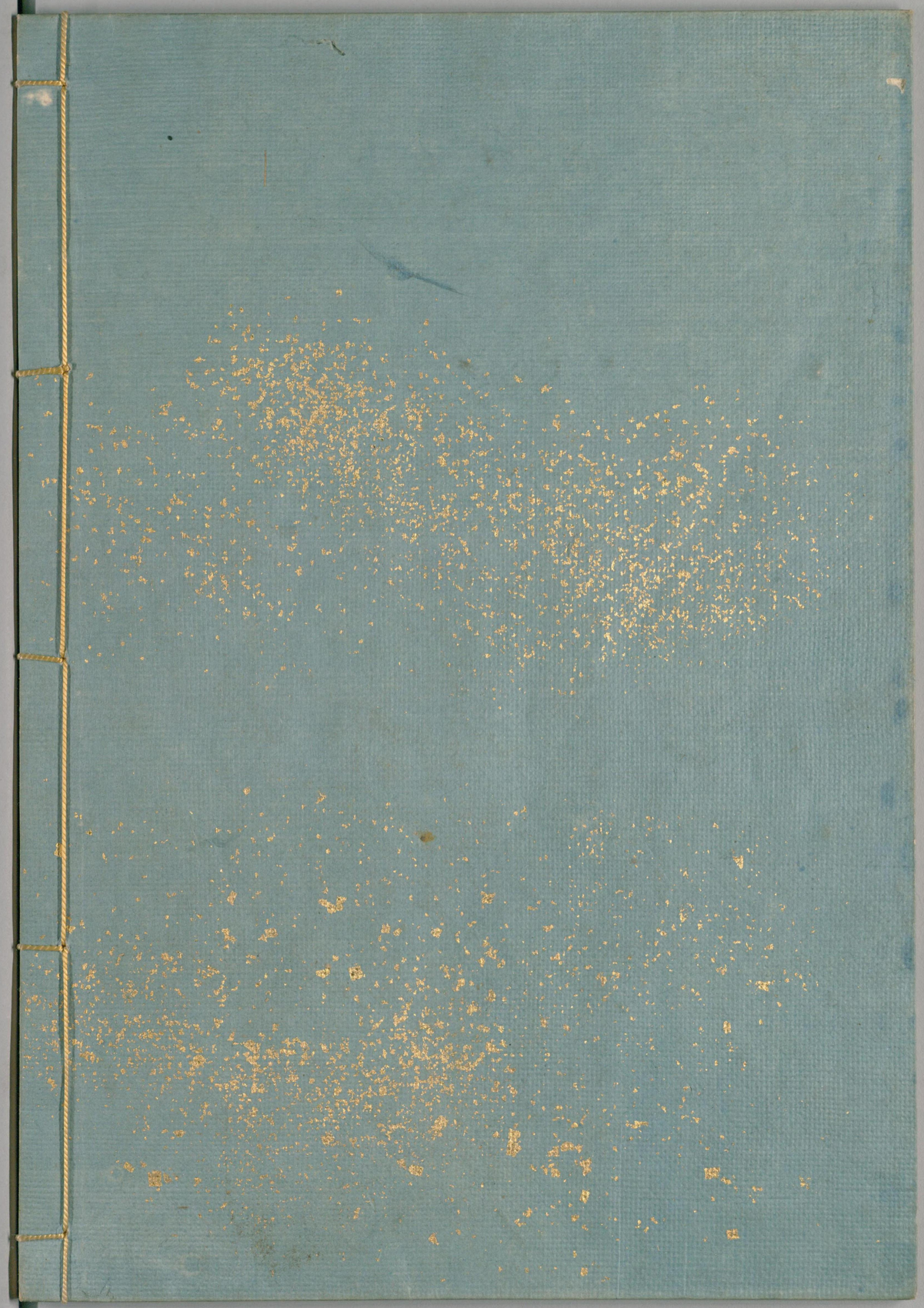
別3
60
1

不審抄出物ノ内

[illegible]

[illegible]

[illegible]



国立国会図書館　タイトル『湖月抄』 請求記号 本別3-1

ガラス使用